

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 15 日現在

機関番号：12603

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26885026

研究課題名(和文) アフリカの野生動物保全に潜む動物愛護の環境統治性の検討

研究課題名(英文) Study on Environmentalism of Animal Welfare/Right in Wildlife Conservation in Africa

研究代表者

目黒 紀夫 (Meguro, Toshio)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：90735656

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：今日、アフリカの野生動物保全は新自由主義の権力的な作用、すなわち新自由主義的な環境統治性のもとで取り組まれている。それに対して本研究は、アフリカを代表する「野生の王国」であるケニア南部アンボセリ地域を事例として、動物愛護の思想・活動がいかに「コミュニティ主体」を掲げる現在の保全活動のあり方を規定しているのかを明らかにするとともに、地域社会が完全にその統治下に置かれているわけではなく、一定の行為性を発揮していることを示した。

研究成果の概要(英文)：Today, wildlife conservation is conducted under the influence of neoliberal power, that is neoliberal environmentalism, in Africa. This study takes up the Maasai community in Amboseli area in Southern Kenya, which is globally known as a "wild kingdom." The result is that, on one side, it is examined how the ethics and practice of animal welfare/right direct the course of "community-based" wildlife conservation today and governed local people, and on the other hand, it is demonstrated that local people are not fully governed and show their own agency.

研究分野：環境社会学、アフリカ地域研究

キーワード：環境統治性 野生動物保全 アフリカ ケニア マサイ

1. 研究開始当初の背景

アフリカの野生動物保全をめぐるのは1990年代前後に大きな転換が見られる。一方では、それまでの「要塞型保全」を批判する「コミュニティ主体の保全」が各国において政策として採用され、国家的・国際的な支援下で取り組まれるようになった。もう一方では、世界的に広まる新自由主義の影響を受け、「コミュニティ主体の保全」が広まるなかで野生動物は「共存」の対象としてではなく個人が「所有」し自由市場において合理的に利用する「資源」として位置付けられるようになった。2000年代になると、こうした新自由主義的な野生動物保全の是非が問われるようになり、それが地域社会にもたらす正負両面の影響が具体的な事例にもとづき検討されるようになった。そして、価値中立的な装いを見せつつも実際には新自由主義のイデオロギーに基づく権力の作用、すなわち「新自由主義的な環境統治性 (neoliberal environmentalism)」のあり方が問われるようになってきている (Büscher et al. eds., 2014)。

2. 研究の目的

今日のアフリカの野生動物保全をめぐる「新自由主義的な環境統治性」については、近年、議論が盛り上がりを見せている。その一方で、動物愛護の思想・活動がアフリカ各国における政府の政策やNGOの活動に強い影響を及ぼしている事実はこれまでも指摘されてきたものの (Martin, 2012)、現場において具体的にどのような権力的な作用をもたらしているのかについて明らかにされてきたとは言い難い。そこで本研究では、動物愛護の思想・活動がアフリカの「コミュニティ主体の保全」の現場においてどのような環境統治性を発揮しているのかを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、アフリカを代表する「野生の王国」として世界的な知名度と人気を誇るケニア共和国のなかでも、野生動物観光の目的地として人気であるのと同時に、「コミュニティ主体」を志向する保全活動が過去半世紀にわたって取り組まれてきたアンボセリ地域に暮らすマサイ社会を事例研究の対象として選定した (cf. 目黒, 2014)。

事例地では政府機関や国際NGOなどによって複数のプロジェクトが並行して進められているが、本研究ではそのなかでも特に国際的な注目を集めているマサイ・オリンピックについて調査・研究を行なった。二次資料の収集とは別に、2014年12月、2015年2~3月、8~9月、2016年2~3月に現地調査を行なった。現地調査のさいには地元の住民を通訳として雇用し、マサイ・オリンピックにかかわる利害関係者への半構造的なインタビューをするとともにマサイ・オリンピック当日の観察と記録も行なった。

4. 研究成果

マサイ・オリンピックは、国際NGOビッグ・ライフ・ファウンデーション (BLF) によって主催されている。BLFは1990年代からアンボセリ地域で高級エコロッジを運営している白人が、1992年に設立したNGOを前身として2010年に設立したNGOである。現在は300人以上のゲーム・レンジャーを雇用しているほか、これまでに30以上のレンジャー・ポストを建て、奨学金の支給や学校の建設、雇用機会の創出、野生動物による家畜被害への補償なども実施している。政府機関がアンボセリ地域に配置しているゲーム・レンジャーは50人程度であり、また、予算不足から家畜被害への補償も行なっていない。これらの点でBLFは現在のアンボセリ地域における野生動物保全を主導している組織といっても過言ではない。そうした組織によって2012年に第1回大会が開かれ、その後は隔年で開催が続けられているのがマサイ・オリンピックである。

具体的には、マサイ・オリンピックとはマサイの青年たちを対象とする4チーム対抗の陸上競技大会である。200メートル走、800メートル走、5000メートル走、槍投げ、棍棒投げ、高跳びの全6種目の競技が行なわれ、その入賞者 (上位3人) と総合優勝チームには賞金と賞品が与えられる。各種目の1位から3位の選手には金・銀・銅のメダルと賞金が与えられ、800メートル走と5000メートル走の金メダリストは、特別に翌年のニューヨークシティマラソンに招待される。また、1位から3位の選手が所属するチームには3点、2点、1点が与えられる。6種目の合計点数がもっとも多いチームが総合優勝で、トロフィーと改良品種の種牛を獲得する。

BLFはマサイ・オリンピックを「伝統的な戦士の技能」にもとづく組織的なスポーツ競技会と位置付けているが、そうしたイベントをBLFが主催するのは、それによってマサイの歴史を変革しようとしているからである。つまり、慣習的にマサイの青年たちは、自らの勇敢さを示して人びとに認められるためにライオン狩猟を行なってきた。けれども、それは今日の野生動物保全に反するというのがBLFの理解であり、ライオン狩猟にかかわって青年たちが自らの男らしさを競う機会としてマサイ・オリンピックを開くことで、「マサイの戦士」という文化は残しつつもライオン狩猟という好ましくない伝統を廃棄しようというのである。

そうして開催されてきたマサイ・オリンピックは、BLFの広報とマサイの知名度から世界各国のメディアによって報じられ、グローバルな支援と注目を集めてきた。たとえば、2014年12月に開催された第2回大会は米・英・仏・日・中の主要メディアによって報道されているし、大会スポンサーにはナショナルジオグラフィック協会も含まれている。

一方、陸上競技大会の主役であるのと同時に保全プロジェクトの対象でもあるマサイの青年たちは、マサイ・オリンピックが競争の場であるのと同時に交流の場にもなっていると、肯定的に評価していた。当日の会場でBLFは、マサイ・オリンピックのアイデアは地域社会から出てきたものであり、マサイ自身が野生動物保全のイニシアチブを取っているとして称賛されていた。そしてメディアはマサイの青年たちにインタビューなどもしていたが、そうした取材者にたいして青年たちは、BLFとほぼ同様の受け答えをしており、マサイ・オリンピックの意図がいかに素晴らしいものであるのか、自分たちがその趣旨にいかにか賛同しているかを説明していた。

これらの結果、マサイ・オリンピックが開催・報道されることを通じて、マサイの伝統的な狩猟を全面的に否定し、それに代わる実践としてマサイ・オリンピック(およびそれを主催するBLFという組織)を肯定する言説がローカルからグローバルなレベルにまたがって流布するようになってきている。そうしたとき、マサイ・オリンピックを主催するBLFは動物愛護を強く信奉する白人によって設立・支援されているのだが、それが発信する言説からはマサイと野生動物の共存が狩猟によって支えられてきた事実や、狩猟が禁止された今現在獣害が深刻な問題になっている事実が抜け落ちていく。言い換えると、経済的・社会的に強い影響力を持っている動物愛護者によってグローバルに流通する知識が選択・操作されていることになり、それはつまりマサイの歴史的な実践や現在における多様な認識を無視することにつながっている。

動物愛護者が理想とする野生動物保全のあり方に逆行する地域の慣習が一方的に否定された行為と見なされ、動物愛護者にとってより望ましくかつ人目を引くイベントへと変革することが試みられているが、そこに権力の働き、すなわち、「動物愛護の環境統治性」を見出すことができることになる。そしてその試みがグローバルなメディアによって「コミュニティ主体」の取り組みとして紹介されることで、それが動物愛護者の政治的・経済的な力によって統御されている事実が隠されていることにもなる。

ただし、対外的にマサイ・オリンピックを絶賛しているマサイの青年たちが、心底からその理念を受け入れているわけではない点に注意する必要がある。外部者にたいしては、かつての狩猟が今日にあってはいかに無意味な行為であるかを力説するマサイの青年たちは、同時にマサイ・オリンピックの当日に授与されたメダルやトロフィーに特別な価値を見出していない。そして最近では、マサイ・オリンピックの場で動物愛護者がマサイの社会や文化を語ることに反発し、自分たちが自ら外の世界に向けてマサイを表象す

べきだと主張するようになってきている。

マサイ・オリンピックが中長期的に、地域社会にどのような影響を及ぼすのかについては今後の継続的な調査が必要だが、新自由主義とはまたちがう形で動物愛護も環境統治性を発揮しているものの、地域社会が完全にそれによって「主体化=従属化」(cf. バトラー, 2012)しているわけではなく、グローバルな情勢をふまえて能動的に自らの「位置取り(positionings)」(Hodgson, 2011)を模索していることになる。2016年12月に開催が予定されている第3回大会に向けてマサイの青年たちは、自分たち自身がマサイの文化について対外的に語るべきだと考えるようになっており、BLFがマサイの表象を独占している状況に異議を申し立てている。これによってマサイの青年たちがマサイおよびマサイ・オリンピックを表象できるようになるかはまだ分からないが、「動物愛護の環境統治性」が絶対的なものではないことは指摘できるだろう。

<引用文献>

Büscher, B., W. Dressler and R. Fletcher eds. *Nature™ Inc.: Environmental Conservation in the Neoliberal Age*. University of Arizona Press, Tucson, US, 2014

Hodgson, D. *Being Maasai Becoming Indigenous: Postcolonial Politics in a Neoliberal World*. Indiana University Press, Bloomington, USA, 2011

Martin, G. *Game Changer: Animal Rights and the Fate of Africa's Wildlife*. University of California Press, Berkeley, UK, 2012

バトラー、ジュディス、権力の心的な主体化=服従化に関する諸理論、月曜社、2012

目黒 紀夫、さまよえる「共存」とマサイ ケニアの野生動物保全の現場から、新泉社、2014

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

目黒 紀夫、現場を取り巻く知識の多様性 ケニア南部の野生動物保全の事例から、国際開発研究、査読有、2016、24巻、2号、pp. 51-66

目黒 紀夫、野生動物保全が取り込まれる土地における紛争と権威の所在 ケニア南部のマサイランドにおける所有形態の異なる複数事例の比較、アジア・アフリカ地域研究、査読有、14号、2巻、2015、pp. 210-243、https://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/dl/publications/no_1402/AA1402-03_Meguro.pdf

Meguro, Toshio, Becoming Conservationists, Concealing Victims: Conflict and Positionings of Maasai, Regarding Wildlife Conservation in Kenya, African Study Monographs Supplementary Issue, 査読有、Vol. 50、2014、pp. 155-172、http://jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/kiroku/asm_suppl/abstracts/pdf/ASM_s50/Meguro.pdf

〔学会発表〕(計4件)

Meguro, Toshio, Oversights on human-wildlife relations in Republic of Kenya: From the perspective of environmental sociology, Vth International Wildlife Management Congress, 査読無、2015年7月29日、札幌コンベンション・センター

目黒 紀夫、「コミュニティ主体の保全」の現場で語られる「伝統」の是非 アフリカの環境保全 = 開発援助をめぐる科学と倫理の役割について、日本国際開発学会第16回春季大会、査読無、2015年6月7日、法政大学

目黒 紀夫、第2回マサイ・オリンピック 暇な戦士を忙しいアスリートに変える試み?、日本アフリカ学会第52回大会、査読無、2015年5月23日、犬山市国際観光センター「フロイデ」

目黒 紀夫、環境社会学から考える人間と野生動物のかかわり、「野生生物と社会」学会第20回大会、査読無、2014年10月31日、犬山市国際観光センター「フロイデ」

〔図書〕(計2件)

山越 言、目黒 紀夫、佐藤 哲(編入) アフリカ潜在力 5 自然は誰のものか 住民参加型保全の逆説を乗り越える、京都大学学術出版会

目黒 紀夫、さまよえる「共存」とマサイ ケニアの野生動物保全の現場から、新泉社

6. 研究組織

(1) 研究代表者

目黒 紀夫 (MEGURO, Toshio)
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化
研究所・研究機関研究員
研究者番号: 90735656